新・世界洋上紀行

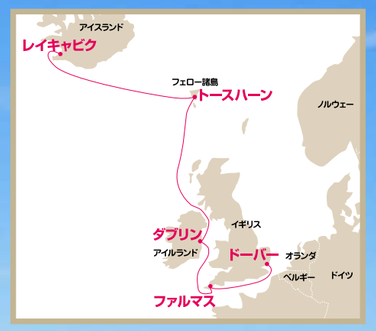
洗練のヨットスタイルを愉しむラグジュアリーな海の旅

第6回 SAGA RUBY（サガルビー）／後編

英国客船「サガルビー」で巡る
イギリス・アイルランド周遊～アイスランドへ向かう旅

かつて、オーシャンライナーと呼ばれる船があった。まだ航空機が飛んでいなかった時代、目的地に少しでも早く着くために建造された高速の遠洋航路船。やがてその役割を航空機に譲ったオーシャンライナーだが、船旅を愛する人々に支えられ、大西洋の東西を結ぶ定期航路は1970年代まで存続していた。かつてオーシャンライナーとして活躍し、現在はクルーズ客船としてそのクラシックなスタイルが愛されている英国の「SAGA RUBY（サガルビー）」。今回はサガルビーの旅の最終回、アイスランドの首都レイキャビクを紹介する。

text&photo: Masaaki Higashiyama
special thanks: SAGA
Mercury Travel
http://www.mercury-travel.com



PB2012.04_P112-117.indd 112-113 12.2.15 6:44:36 PM

8月11日　レイキャビク(アイスランド)

午前8時、サガルビーは下船地アイスランドのレイキャビクに定刻どおり接岸、明日夕刻の出港までここで停泊する。昨晩はうそのように穏やかな海。やや曇りの空の合間から弱い陽が差し込み、銀色の空と海が溶け合って、幻想的な航海日だった。

レイキャビクは北緯63度。アイスランドの首都で、人口約30万人。8月の平均気温は17度。実は日本とアイスランドにはある共通点がある。それは火山が豊富な島国であること、そして両国は、ユーラシアプレートと北アメリカプレートの始点と終点として繋がっている。

クルーズ船では、各寄港地でオプショナルツアーが用意されている。船から出発して、見所を効率よくまわり、また船まで送り届けてくれるので安心だ。また、サガクルーズの場合、ほとんどの港で街の中心まで無料の送迎バスが運行される。これを利用して、自身で散策することも出来る。

朝食後、街の中心まで出てみた。珍しい客船が停まっていた。アテナというポルトガルの客船、建造はなんと1948年。1973年建造のサガルビーなんてひよっこである。このアテナもいい形をしている。ビンテージカーの様相とでも言おうか。中はどうなっているのだろうか？船好きとしてはとても気になる。実はこのアテナ 、3月に横浜にやってくる。船齢64年にしてなお世界の海を渡っている。

繁華街を散策する。ちょうどお昼時、レストランの屋外テラスは地元の人たちで人気。短い夏、日差しを浴びるのが心地良いのだろう。緑が美しいちょっとした広場では、親子連れやカップルが楽しそうに過ごしている。きっと今が、一番いい季節なのかもしれない。

先述のとおりアイスランドは火山の国、国内のエネルギーは地熱と水力発電でまかなわれている。警官は銃を持たず、軍隊も存在しない。こんなにも平和な国が地球上に存在するという現実、素晴らしいことだ。

午後のシャトルバスで船に戻る。最後のディナーテーブルで、お互い今日の出来事を報告し合う。「ゴールデンサークル」というアイスランドの大自然を巡るオプショナルツアーに参加した同行の日本人一行は、氷河から解けた水が流れ落ちる巨大な滝や激しく噴きあがる間欠泉など、ダイナミックなアイスランドの自然を熱く教示してくれた。

そしてこの日は、ディナーの後、全員で午後7時出発のオプショナルツアーに参加、ブルーラグーンという温泉に行く。内陸に向かってバスで走ること約1時間、一面不毛の地、火山岩の中にブルーラグーンがある。ここは地熱発電所の発電に使われた温水が利用されている。

淡い水色の巨大な温泉は38度前後、日本人としてはもうちょっと熱くしてほしいところだが、それでもやっぱり温泉は気持ちいい。体がほぐれて暖まる。風呂上りに屋外でいただいた生ビールの味が、また格別だった。

船旅を重ねていて、いつも感じることがある。旅には必ず最後の夜がやってきて、そしてその夜が、なぜかいちばん落ち着くのだ。時にどこか、自分が最後の夜を待っているような気さえすることがある。それはなぜだろう？　本当はあれもやりたい、これもやりたいと、クルーズ中は様々な「欲」があるのだが、明日船を降りるとなれば、じたばたしても仕方がなく、その欲がなくなってしまうからではと結論付けた。それでもやっぱり、明日船を降りるのはどこかさびしい。荷物のパックも済んでいないのに、「もう一杯だけ…」とバーに足が向いてしまう。

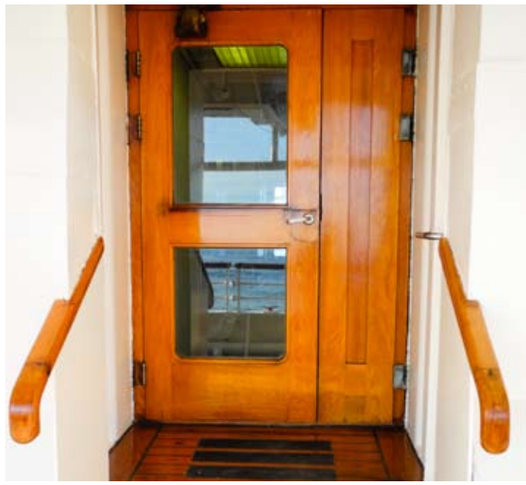
8月12日　レイキャビク(アイスランド)

いつものようにモーニングティーが部屋に運ばれてきた。昨日より少し、陽射に力強さがある。あわただしい1日が始まる。

まずは朝食。ビュッフェで軽く済ませ、部屋に戻りスーツに着替える。「あの男」がやってくるからだ。彼の名は、ジェームス・デュグイド。歳は70近いと思われるが、声は大きくはつらつとしている。サガクルーズ社の営業部門のトップ。クイーンエリザベスⅡなど名船を世に輩出した英国キュナード社からサガへ転身、セールスを中心とした実質面を取り仕切る男だ。

彼とは一昨年の冬、ロンドンのホテルで初めて会った。実は私はサガルビーという船をおおよそ5年前から追いかけていた。なんと

PB2012.04_P112-117.indd 114-115
12.2.15 6:44:39 PM



か日本での販売にこぎつけたい。しかしまともにアプローチしても門前払い状態、なすすべがなかった。そんな事態があるとき動き出した。2008年、クイーンエリザベスⅡ引退のニュースが飛び込んできた。まだ乗船したことのない私は、急いで最後の大西洋横断に予約を入れ、サウザンプトンからニューヨークまで乗船した。その洋上にクルーズ関係者なら誰もが知る著名な客船評論家が乗船していた。このチャンスを逃すまいと、面識もない私は彼に船上で直訴、サガルビーへの思いを伝えた。数ヵ月後、サガクルーズ社から連絡が入った。重い重い扉が動いた瞬間だった。

実質的な契約はすべて終えていたのだが、今朝は契約書へサインを交わすこととなっていた。キャプテンが同席の下、ジェームスと私は船首にあるブリタニアラウンジでサインを交わし握手をした。

その後のランチでは、リラックスして談笑。サガクルーズはダンスが素晴らしいということで定評があるのだが、私はどうもダンスは恥ずかしいというのがあって、未だ踊れない。ジェームスには「そんなシャイじゃだめだよ」と言われる始末。食事を終えて席を立つと、あの優秀なウェイター、マノーロが、美しくデザインされた航海中のディナーメニューをひとまとめにしたものを用意してくれていた。

私は次のビジネスのため、午後の飛行機でロンドンへ戻らなければならない。下船口での別れ際、ジェームスは手荒くバンバンと私の背中を叩き、「お前が長年追いかけた船だ。日本でガンガンセールスしてくれ！」と激を飛ばした。

サガルビーは、毎年1月から4月まで世界一周クルーズを行っている。今年の世界一周では、3月12日に長崎に寄港。そしてこの長崎を基点に、上海へ6泊、平良（宮古島）へ8泊、香港へ12泊の各クルーズ「コレクターズ・ボヤージュ」が発売され、古くからの客船ファンを中心に大変好評をいただいている。クイーンエリザベスⅡなき今、このサガルビーが、オーシャンライナー最後の大物であることは間違いない。

今日、クルーズ界の流れは、ひたすら大型化に向かっている。なぜなら、そのほうが船会社が儲かるからだ。しかしサービスレベルは、確実に落ちる。一度に数千人に美味しい食事など、作れるはずがないのだ。サガルビーはまったくその逆を行っている。それは、一言で言うなら「英国の価値観」である。新しければ良いというものじゃない。それがブリティッシュスピリットだ。そしてクルーズの満足度は、立派なハード（船）だけでは達成されない。ソフト面（人のサービス）がとても重要なのだ。だからサガは、クルーのトレーニングは安全面も含めて非常に厳しい。

来年の世界一周では、サガルビーを？7年ぶり？に横浜へ寄港させたいと、現在鋭意交渉を続けている。ベイブリッジをくくり、氷川丸を左手に、大桟橋へ接岸する姿を再び見てみたい。今年はぜひ、この歴史的な客船「サガルビー」に注目していただきたい。 **P.B.**

CRUISE DATA

サガルビー "Iceland's Natural Wonders" 15日間

2011 / 8 / 4 ～ 8 / 19（取材は、8 / 4 ～ 8 / 12）
クルーズ代金：2,286 ～ 8,423 UK ポンド（1UK ポンド=約 130 円）
■問い合わせ先：マーキュリートラベル TEL: 045-664-4268

Profile

東山真明

海と船の旅をこよなく愛する、海外クルーズエージェント。大型客船よりも、プライベート感ある上質な「ヨットスタイル」のクルーズにこだわり、国内で小型船クルーズを取り扱う 4 社による「スモールシップ アライアンス」に加盟、その啓蒙に励む。マーキュリートラベル代表。
■マーキュリートラベル TEL: 045-664-4268
http://www.mercury-travel.com

PB2012.04_P112-117.indd 116-117 12.2.15 6:44:42 PM